知っていますか？郷土の民話

多功の二本松

昔々、高い建物が無かったころ、大きな木は場所の目印になることが多々ありました。街道沿いの一里塚の上に松が植えられたりするのはまさにそれで、この他にも集落にあるお寺には、必ずといっていいほど大きな木があり、遠くにその木が見えると、ようやく目的地に着いたとの安堵感からホッとした気持ちになったことでしょう。実は町内にもこのように長い間親しまれた木がいくつかありました。今月はその一つ、多功の二本松を紹介します

今は広大な工業団地が広がる多功南原の地に、その木はありました。ここのすぐ西側には、江戸と下野の地を結んだ日光道中が南北に走り、日光道中の裏街道であり多功本町を通った通称小山街道のほとりに、多功の二本松がありました。この松の木は、多功の地で育った人々にとっては親しみのある松だったようで、今でも街道を徒歩で歩いた時代の人々のふるさとの木に対する話が伝わっています。

江戸時代になると、それまでの戦乱の世から一転して、農業技術の進歩に伴って作物の収穫量が増え、これに伴って現金収入が増えました。そして、豊かになった人々は、一生に一度は三重県にある伊勢神宮を参拝したいとの夢を持つようになりました。当時農民は移動の自由がありませんでしたが、伊勢神宮参拝は許されることがほとんどでしたので、まさに最初で最後の大旅行でした。そして旅立ちの日、伊勢神宮へ向かう多功の旅人は親戚や友人たちに二本松で見送られたそうです。旅人は何度も何度も振り返りながら、小さくなっていく多功の二本松を見て、心細く感じたことでしょう。逆に長い旅路の果て、ようやく遠くに懐かしい多功の二本松が見えてくると、やっと帰ってきた安堵感に包まれ、旅人は松の根元でしばらく休憩し、無事故郷にたどり着いたことを喜んだとのことです。

残念ながら、多功の二本松は一代目が戦後枯れてしまい、二代目も平成に入り枯れてしまったことから、現在はその跡を見ることしかできませんが、その場所に立つと、当時の旅人の思いが伝わってくると思います。

多功の二本松のあった場所には、現在石碑だけが残っています

広報俳句

初孫の　歯並び見せる　初笑ひ　　浜野　正男

丁寧な　文字ではじまる　初日記　　大八木　喜重郎

瑠璃色の　星に埋もれ　冬の空　　柳田　石村

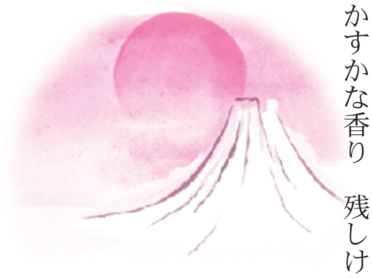
寒雀　先に降り立ち　仲間呼び　　蓬田　四方

来年は　来年こそはと　年暮るる　　伊沢　静香

海原の　刻々かわる　初日の出　　濱野　マス子

電飾の　おとぎの世界　師走かな　　阿部　信子

初空や　筑波男体山　雄姿なり　　野沢　花枝

二歳児の　意地貫けり　カルタ取り　　上野　キミエ

菊を焚く　かすかな香り　残しけり　　武井　ミイ子